



者

心のおもむくままに、ケセラセラ

山鹿光裕*

That's the way things are.

Key Words : jurist, local official, high energy physics

海外では一度就職した後で二度目の大学を卒業しなおすことはめずらしくないようであるし、日本でも周囲を見渡せば大学を二つ卒業している人が意外と多い。工学系から理学系に移ったり、文学部に入り直したり、医学部に入り直し医者をめざしたり。しかし私のように、法学部卒が理学部に入るというケースはあまり多くないのかもしれない。それで私の場合、「なんで法学部から？しかも医学部じゃなくて理学部に？公務員をやめてまで？なんのために？」と、ハテナを連発されることがある。

1. 興味の方向

子供のころから、モノ作りや機械が好きで、よく時計などを分解、再生させて遊んでいた。小学生のころ、「COSMOS」というTV番組や宇宙博、スペースシャトルの話題などで宇宙に興味をもち、百科事典などを何冊も読み漁ってロケットや飛行機の仕組みに夢中になった。小学校の卒業文集には「将来の夢は科学者」などと恥ずかしげもなく書いている。中学生の頃は、いわゆるマイコンブームの初期の頃であり、コンピュータのある友人宅によくお邪魔して(うちでは当然買ってもらえなかった)、BASICかアセンブラしか動かない、今からすれば超貧弱なSPECのマシンで、友人とワザを競い合っていた。

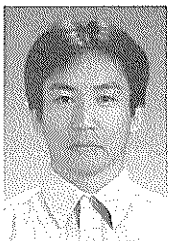
高校は、中学教師だった父が薦める高校ではなかった。「一流高校にいけばつぶしがきく」という、煙

にまくような父の言葉を尻目に、近くのそこそこ良い高校に通った。新任の数学の先生がいわゆる「紙一重」的なアブナイ雰囲気先生で、いささか衝撃を受けたが、自分で証明さえできればどんな解法でもアリといわれ、あれこれ挑んだものだ。この先生のおかげで数学の楽しさを味わうことができたとも感謝している。当時の校長の方針だった自由な校風のおかげか、ビリビリした競争の雰囲気がほとんどないにもかかわらず、それでもみな大学に合格してしまうのだから実は大した高校だったのかもしれない。自分の選択に間違いはなかったと実感した。私も現役で大学に合格できた。合格したのは東北大学法学部。

関東人であった私にとって、東北地方は北海道に次いで「みちのく」「厳冬」などロマンを感じるあこがれの地であった。で、わたし的に東北大学そのものはまったくOKだったわけだが、なぜ法学部になったのか？理系でなくて？話せば長いことながら、いや実際このコラムに書くには長くなりすぎるので、ここでは割愛する。ただ「文系のなかでは一番つぶしがきくから」との父の言葉が、このときは法学部に決めた理由のひとつであった。

2. 最初の大学

高校でいわゆる「現代社会」「倫社・公民」系の科目が大の苦手だった私にとって、法学部向けの1,2年次の講義の多くはあまり楽しいものではなかったが、3年次からの専門科目で実定法、政治学、行政学などの分野からいくつか選んで履修する中、実定法つまり現実に制定され運用されている法律に関しては大変興味を惹かれた。実定法は相互に有機的に結び付いた論理体系をなしている。日常生活の場面場面を法律的に解釈してみれば、そこにはこの法律がこういう働きでこういった効果をもち、その結果相手方はこれこれをしていることになるのだ、など、



* Mitsuhiro YAMAGA
1968年2月生
2001年 東北大学大学院理学研究科
物理学専攻博士課程修了
現在、大阪大学大学院理学研究科
物理学専攻 山中卓研究室、特任助手、
博士(理学)(東北大学)、高エネルギー物理学実験
TEL 06-6850-5357
FAX 06-6850-5532
E-Mail yamaga@hep.sci.osaka-u.ac.jp

日常生活そのものが少し違って見えてきてたいそう面白い。

現代の社会は複雑怪奇で、さまざまな問題が常に随所で起こっており、誰がいつ巻き込まれないとも限らない状態である。他人はうかつに信用できず、警察を含めお役所もまたしかり。昨今はびこっている詐欺事件を始め、新聞紙面を毎日賑わせている多くの事案を見るにつけ、法律を学ばなかったら社会でどれだけ不安を感じるのかとつくづく思う。

3. 最初の就職～路線変更

バブル全盛期で就職も売り手市場の中、さして興味のある職や企業があったわけでもなく、公務員試験を受けて某県庁に入り、地方公務員となった。配属は一応法律業務が主である本庁の部署だったが、ほとんどの業務は「私でなくてもできる」、必要で重要ではあるのだけれど面白くない仕事だった。また、ある種の公務員の傍若無人さを目の当りにし、社会構造の不条理を実感する機会ともなった。(たまたま、かもしれません。公務員のみなさんごめんなさい。)そんなこんなで、公務員でいることに急速に失望した。私でなくてもできる仕事であれば、私でない誰かに代わってもらって、私は私でなければできないような仕事をしたい。自分に何ができるか、何をしたいか、と考えたとき、胸にこみ上げてきたのは法律ではなく子供のころの興味であった。結局父の言う「つぶし」は私にはきかなかつた。確かに法学部卒は進路の選択肢が多いとは思いますが、その選択肢に宇宙、機械、数学などはありません。当時の私にとっては選択肢がないも同然である。

路線変更について思い切って妻に切り出したところ、驚いたことに妻は多めに賛成した。逆に「公務員など早くやめちゃえ。いつやめるかと思っていた。」妻とは私が大学1年のときからの長いつきあいで、当時同じサークルの2年先輩だった彼女は「法学部生というのが信じられん。文系など全然合っていない。」などと私にケチをつけていたのだが、話せば長くなる経緯を経て私の卒業と同時に結婚した。退職した後の生活をどうするかについては「私(妻)が働く。」結婚直前まで看護師をしていた妻の給与は、私の公務員初任給の倍もあったのだった。いやはやバイタリティ溢れる人だこと。

4. 二度目の大学

結局、地方公務員は1年4ヶ月で退職した。高校3年次では文系クラスで、物理も微分積分もやらなかったもので、北大の友人に何度か助けを求めながら自分で勉強して2度目の大学受験に望んだ。理学系と工学系のどちらにするか、かなり自分でも悩めるところだったが、物事を根底から知らないと気が済まないという好奇心の方向に加え、妻の「理学部じゃなきゃお金出してあげない」という不可解とも思える言葉の後押しもあって、理学部物理学科生として二度目の東北大生となった。

興味ある分野では何を勉強していても楽しいものだ。4年次に上がるときの研究室配属では、研究室見学時の印象がもっとも良かった高エネルギー実験グループに希望どおり配属になり、居心地もよかったのでそのまま大学院後期課程まで進んだ。たまたまKEKでのB-factory実験の立ち上げ時期であったため、検出器のR&Dから始まった私の研究は、建設、解析準備、実験開始と、一通りの手順を全て経験することができ、最初の結果による論文が出る時にD論が完成し、博士号を取得できた。

5. 二度目の就職

その後KEKのポスドクとして拾っていただき、これまたちょうど実験立ち上げ時期にあった、K中間子希崩壊実験(PS-E391a)に参加し、実験準備に精を出した。実験の立ち上げから遂行までの計画全体に、大学院時代に次いで二度も携われるとは、なんというタイミングの良さ。しかし今度は実験開始を見ることなく二年間という非常勤ポストはあっという間に終わり、志半ばにして二度目のポスドクとなる加速器施設に移った。ところがその半年後、大阪大学21世紀COE特任助手が公募され、E391a実験参加も可能だったことから応募したところ運よく採用していただき、心残りだったE391a実験の遂行にこぎつけることができた。現在は、E391a実験を発展させさらに高感度実験を行うためのスタディを進めている。

6. ふりかえると

法学部で学んだことは貴重な経験となった。現在でも法律に興味はあるし、社会的事案の多くを法律

的な目で客観的に見ると一味違って見えてやはり興味深い。また大学や研究所にいただけではふれることのないいわゆる一般社会を満喫することができ、行政の内幕をみることもできた。公務員職は短かったが、本庁勤務で地方行政の中核や裏側をかいま見ることができ、この経験が日常生活の別の局面で有効活用されることとなった。なにしろお役所が恐くない。公務員がどう考えているか、手に取るようにわかるし、もともと私のような人間が携わっているのだと思うと、お役所がなにを言って来ようが平気で対峙できる。実際、公務員の仕事なんて間違いだらけであるし、法学部卒元上級職公務員の私の口にならうものか。

それはともかく。

路線変更後の道は険しく、いまだ任期付き非常勤ポスト、いつクビを切られてもしかたがないという不安定な身分である。退職まで安定が保証された公務員を捨ててまでとる道だったのか、と聞かれば、それでもYESと答えられる。なんのためにと聞か

れれば、心の内なる好奇心を満たすため、といったところか。仕事は仕事、趣味は趣味、と割り切ってしまうことが生来できないタチらしいので、好きな分野でやりたい仕事をやりたいようにさせてもらっている現在、公務員だったときより心に余裕がある。なんとなくいいタイミングで物事が動いている気もするし、なるようにしかならないさと楽観的である。ただし、路線変更時に強く願ったように、私でなければできない仕事ができているだろうか、と常に自分に問いかけてはいるが。

やりたいようにやらせてくれた妻には多めに感謝するとともに、そのバイタリティには改めて敬服する。私がドクターのときにKEKに常駐して研究を進めたいといえ、仙台の大学病院をあっさりやめてつくばで勤務する病院を見つけてくるし、今般大阪に引っ越すときもつくばの病院をあっさりやめてきた。本当は妻もまだ他に勉強したいことがあるらしいのだが、いまだ実現させてあげられていないのが残念である。

